

海沿いを走る曲がりくねった旧道はただでさえ狭いのが、ときおりあるトンネルにぶつかるとさらに狭くなる。ふつうの乗用車ならすれちがうのがやつと、どちらか片方が大型トラックであれば譲りあわなければ通行は不可能だ。

ハンドルを握る北見の横で葛原は夜に目をこらしていた。梅雨どきにつきものの勢いのない雨は真夜中すぎにあがっていたが、海沿いでてからは濃い霧がたちこめている。

霧はまるで自由に動きまわるカーテンのようで、葛原が見るところ、海上から海岸に向けて次々と押しよせてくるのだった。その霧のせいで車内の空気もじつとりと湿っている。バンの後部に釣り道具とともに積みあげられたオキアミの冷凍ブロックが溶けるにつれ、さらに湿度が高くなったように思えた。加えてオキアミの強い臭いがこもっている。たぶんこの臭いはしばらく車からぬけないだろう。

葛原はフロントガラスの左上に吸盤でとりつけた小さな鏡をのぞいた。後部席にひとりですわる初井の顔が映っている。一見すると眠っているようだが、とてもそんな気分ではない筈だった。

最初に会ったひと月前に比べると、よく陽に焼け、パンチパーマをあてた髪型のせいで精悍さすらその顔には漂っている。一見すると眠っているようだが、とてもそんな気分ではない筈だった。

車が登り坂にさしかかった。葛原はライフジャケットの下のフィッシングウェアから煙草をとりだした。腕時計を見る。日の出まであと四十分ほどだ。

視線を前に移した。坂の頂上にトンネルがあった。葛原は口を開いた。

「このトンネルを抜けるともうひとつ、先にトンネルがあって、港が見える。そこだ」

北見は頷き、

「釣れますかね」

といった。

「どうかな」

葛原は答えたものの、たぶん釣れないだろう、と思った。だからこの時期を選んだのだ。外房では堤防でのオキアミのまき餌を使った釣りは、黒鯛かメジナがターゲットだ。春の産卵——乗っこみ——を終えた黒鯛は今、深場に落ちている。またメジナは冬にならないと大型はなかなか回ってこない。釣りものといえばせいぜい鱈だろうが、鱈ならばもつとよいポイントが他の港にあることを知っていた。

これからのこうとしているのは天然の岩礁の上に造られた小さな漁港で、外房の海岸線にはいくつも点在している。そのほとんどが水深は浅く、満潮でも三メートルから四メートル前後にしかない。そうした港ではよほど外海でもシケない限り、大型魚が釣れることはな

い。

梅雨前線が停滞した海はべたべたの風だった。海面までもが空気中の高い湿気におさえこまれたように、べったりと平らである。

ふたつめのトンネルを車は抜けた。左下に港が見えた。両腕で海を抱えこむ格好でくの字型の堤防が二本のびている。百メートルほどの、たいして長くないコンクリート製の堤防だった。両方の先端部に水銀灯が立っている。どちらにも人けはない。

「あそこだ」

車は坂を下っていた。二本の堤防のつけ根に傾斜をつけた船揚げ場があった。だが、ほとんどの船は海面に浮かんでいる。早朝の出漁に備え、腕の内側できつちりと舳と舳を接するように係留されているのだった。

「着きました？」

背後から初井が訊ねた。

「着いた。まず釣りの支度だ」

葛原はふりかえらずに答え、サイドウインドウを細目に開けた。外の空気が煙といれちがいに流れこんでくる。利いてないと思っていた車のエアコンが立派にその役目を果たしていたことを知った。なまぬるい空気は、何か形のあるものにぶつかるとたん、水滴にその姿をかえそうなほど湿っていた。

北見が左のウインカーを点した。葛原は背後をふり返った。この数分間、前後に一台の車もない。すれちがった車もない。リアウインドウの向こうは真つ暗だった。

車は港の敷地に入った。正面に漁協の小さな建物がある。飲み物の自動販売機の明りが点っている他は人けがない。

「左の堤防のつけ根の方につくれ。駐車場がある」

北見は無言でハンドルを切った。

「葛原さん」

北見がいった。葛原は目をあげた。

漁協の先、プレハブの小さな建物で囲まれた駐車場に二台の車が止まっていた。一台はシルバーグレーのメルセデスで、もう一台はシーマだった。

「ナンバーは」

「ペッツは練馬です」

「くそ」

抑揚のこもらない声で葛原はいった。二台の車は両方とも窓ガラスをまっ黒なシールでおおっていた。

「どうしよう……」

初井は怯えた声でいった。

「Uターンしますか」

北見は訊ねた。

「いやこのままで。まだ一時間以上ある。釣りをするさ」

葛原はいつて灰皿に煙草を押しこんだ。

「どうしてわかつたんだろう」

北見はつぶやき、ちらりと葛原を見やった。葛原も目で頷いた。情報が洩れたとすれば、うしろにいる元信用金庫職員から以外あり得ない。

北見は巧みにハンドルを操り、バンを並んだ漁具小屋に寄せた。

「余計な口はきかずにてきぱき動くんだ。車のことは気にするな」

葛原は初井をふり返っていった。北見がエンジンを切った。

三人はバンを降りた。葛原はリアの扉を持ちあげた。ロッドケース、道具箱、コマセバケツ、折り畳み椅子などを次々と降ろした。

十メートルと離れていない位置に止まっていたシーマのドアが開いた。車内灯が点り、助手席から男が片足を踏み出した。三人の方をじつと見つめている。

葛原は空を仰いだ。空はだいぶ晴れ、黒から群青に色をかえつつあった。

メルセデスのドアも開いた。葛原のかたわらに初井がオキアミのブロックと集魚剤の入った袋をつかんだ。指先が震えている。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。